

令和6年度 教育課程特例校 自己評価と学校関係者評価

信州大学教育学部附属松本小学校

1 教育課程特例校としての取組

本特例は、幼小中の接続を大切に、未来を拓く教育を推進するため、幼稚園で遊びに打ち込み育まれてきた学びの芽を緩やかに統合し、学習の基盤となる資質・能力を心身両面からバランスよく伸長できるように、低学年では「遊びの領域化」（ことば・かがく・くらし・ひょうげん）を、高学年では、「領域の教科化」として「技術科」を設置し、幼小中一貫教育12年間で「たくましく心豊かな地球市民」としての資質・能力を育もうとするものである。

2 自己評価と学校関係者評価

自己評価	学校関係者評価
〈状況〉 1・2学年においては、「ことば」「かがく」「くらし」「ひょうげん」の4つの領域を設置し、その子らしい対象との関わり方を通して、事象を多面的にとらえる探究的な学習を各学級の中核活動を中心に行っている。4・5・6学年においては、技術によってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力を育成する「技術科」を設置し、技術の見方・考え方を働かせ、ものづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を行っている。年間2回行っている学級懇談会において、保護者に児童の探究する姿を通して説明している。 〈成果〉 【遊びの領域化】児童は、教科の垣根にとらわれることなく、自分の『思いや願い、問い』に向かって、夢中になって追究することができている。教師も子どもの『思いや願い、問い』をもとに、その子なりの特長をより発揮しながら教科の本質に迫る姿を捉え、支えることができている。 【領域の教科化】「技術科」では、自然とものづくりに親しんできた子どもたちの「つくりたい」という思いや願いを生かした学習活動が展開できている。また、技術科では誰のためにつくるのかという「相手意識」を徐々に広げながらものづくりに打ち込むことで、中学校の技術科の見方・考え方につながる素地を育む実践につながっている。 〈課題と方策〉 教科の枠を柔軟に捉えた【領域】（【ことば】【かがく】【くらし】【ひょうげん】）の授業では、各学級の中核活動と関連付けて児童の探究意欲を高めることができる反面、【領域】の授業における教科的な評価規準や育成する資質・能力が曖昧になってしまいがちである。今後、1・2学年の【領域】の学習であっても教員自身が各教科で育成する資質・能力を意識して単元計画を作成するよう研究を進めていく。そうすることで、本校の教育課程表に示された授業時数管理の意識を高め、児童にとってより本時のねらいがわかりやすい授業の展開につなげていきたい。	保護者へのアンケートの結果では、 「【自己表現力】【課題探究力】【社会参画力】が児童に育ってきているか」「幼小中一貫した教育目標、カリキュラムづくりを進めていることをわかりやすく伝えているか」「子どもの思いや願いを大切にし、そこから探究的な学びが生まれるよう指導方法を工夫して授業をしているか」についての質問項目は、どの項目も肯定的な回答が8割～9割を占め、研究開発学校指定研究で取り組んできたことの内容や児童の姿にあらわれる資質・能力等を保護者が受けとめることができていると判断される。 児童アンケートでは「授業がわかりやすいと感じたり、楽しく授業に取り組んだりしている」という授業評価に関する質問項目は、肯定的な回答が8割程度となった。 学校評議員からは、『どの授業も「なぜ」を追究していて、子どもたちが瞳を輝かせて取り組んでいた。「子供と共に創る」「世の中とのつながり」「探究のサイクル」等、要所がきちんと押さえられている。これからも大事にしたい』とのご意見をいただいた。

令和6年度学校評価全体集計（関係箇所抜粋）

1 実施期間 令和6年 11 月～12 月

2 実施対象(回答者)

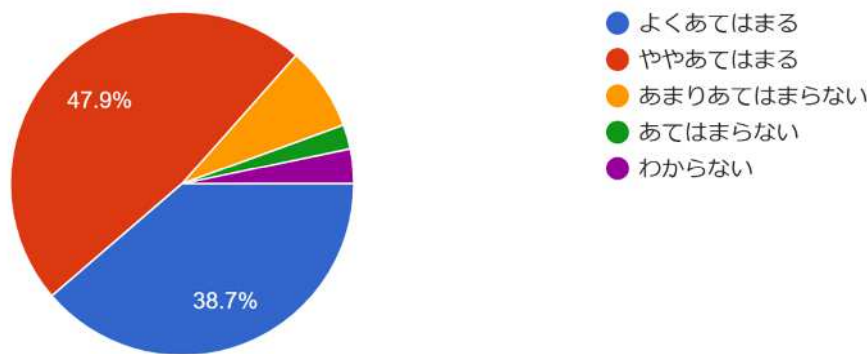
児童 420 名(305 名),教員 20 名(10 名),保護者 323 名(167 名)

3 結果

(1)児童アンケート

質問：私は、授業がわかりやすいと感じたり、楽しく授業に取り組んだりしている。

305 件の回答

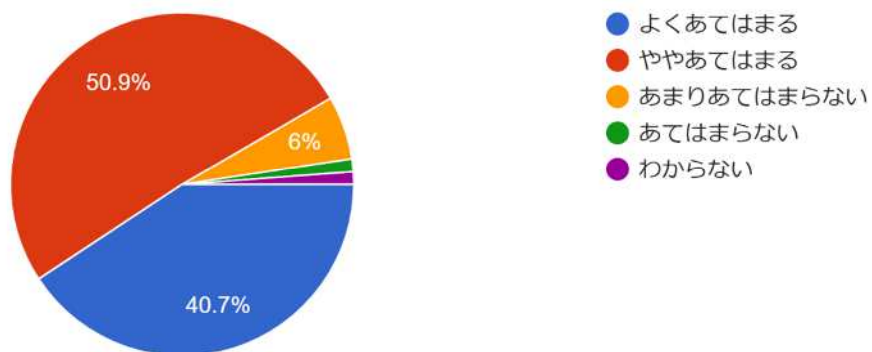


R 1 年度	53. 7%	37. 7%	5. 1%	1. 7%	1. 7%
R 2 年度	53. 1%	36. 9%	6. 6%	1. 2%	2. 3%
R 3 年度	50. 7%	37. 6%	7. 5%	1. 2%	1. 6%
R 4 年度	47. 3%	42. 9%	8. 1%	0. 0%	1. 8%
R 5 年度	48. 7%	36. 5%	9. 4%	4. 7%	0. 7%
R 6 年度	38. 7%	47. 9%	7. 9%	2. 3%	3. 3%
【考察】					
肯定的な回答が例年並 8 割程度となったが、「よくあてはまる」の割合は昨年度より 10 ポイント程度減少した。各公開研究授業の際には、外部講師より各児童の主体的な取組や思考・判断力の高まりなどを評価いただいている。一方で、児童の意識からは、各自の取組のよさが十分感じられていないことが伺える。各授業では振り返りの時間をもち、児童自らが学びのよさを感じたり、これからの学習に向けて自己の取組を調整したりする力の育成を目指すなど、指導の在り方について見直していきたい。					

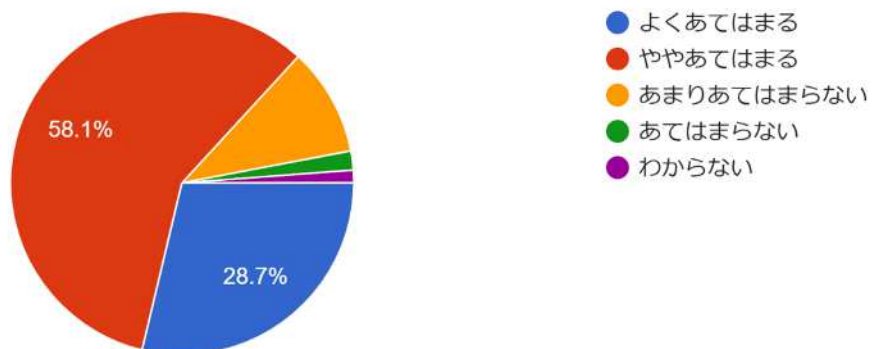
(2)保護者アンケート

質問：子どもは、観て、聴いて、感じたことを自分らしく表現する力が育ってきている。

167 件の回答

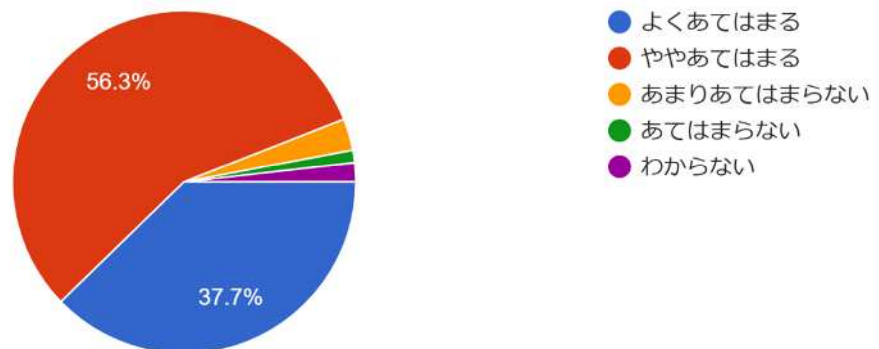


質問：子どもは、自分らしい問いや願いを持ち、物事に粘り強く働きかけたり、問いを解決したり願いを実現したりしようとする力が育ってきている。



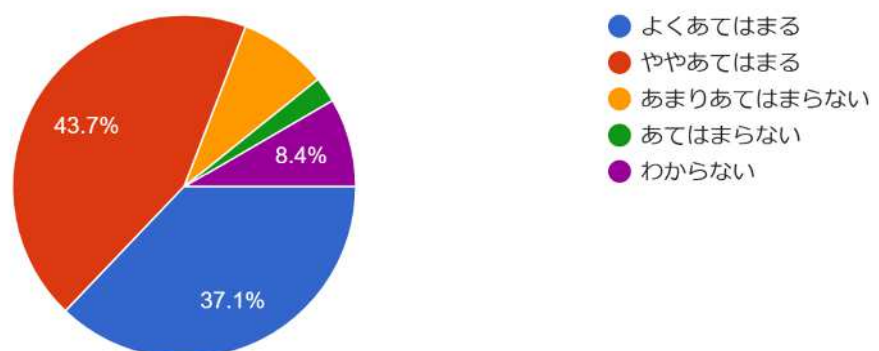
質問：子どもは、多様な価値観（考え）を持つ他者と、共通の目的のために、一緒に活動しようとする力が育ってきている。

167 件の回答



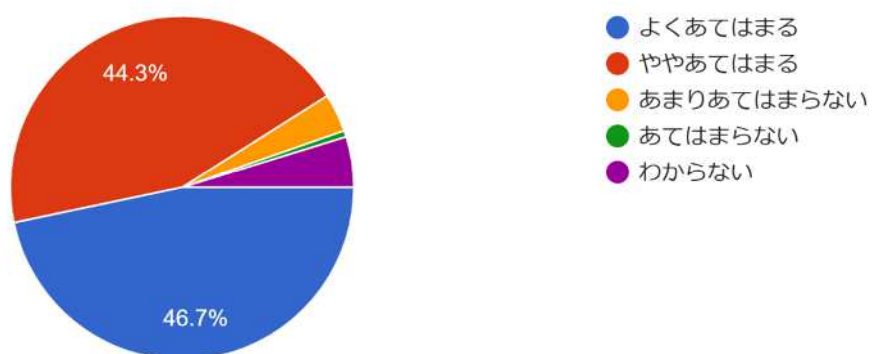
質問：学校は、幼小中を一貫した教育目標、カリキュラムづくりを進めていることをわかりやすく伝えている。

167 件の回答



質問：学校は、未来を拓く「地球市民」を育むために、子どもの思いや願いを大切に
し、そこから探究的な学びが生まれるよう指導方法を工夫して授業をするよう
にしている。

167 件の回答



【考察】

調査項目 1 ～ 5 については、学校経営の重点「探究する楽しさを存分に味わう授業づくり」を評価するために、復活させた。

どの項目も肯定的な回答が 8 割～9 割を占め、研究開発学校指定研究で取り組んできたことの内容や児童の姿にあらわれる資質・能力等を保護者も受けとめることができていると判断される。引き続き、教育課程特例校指定の周知を図ると共に、幼小中一貫校としての取組や効果について発信していく。

学校評議員からのご意見（抜粋）

- ・ 1 階の掲示板からも各学級の取り組み姿勢がよくわかる。どの授業も「なぜ」を追究していて、子どもたちが瞳を輝かせて取り組んでいた。「子供と共に創る」「世の中とのつながり」「探究のサイクル」等、要所がきちんと押さえられている。これからも大事にしたい。児童アンケート、保護者アンケート等でのきめ細かな学校評価など、大変優れている。分析も、保護者の回答も大変いい。
- ・ 参観の様子については口頭でお伝えしたとおり 中庭が舞台になって学校が動いている。観察して飼育する。地域と関わる。一つの材を使いながら多教科へつながる。さらに深い学びや自分は何を選択するのか に踏み込める学習にしていきたい。学習者の発達段階に応じた主体性（学習者エージェンシー）に磨きがかかることを期待している。1 階保健室前にある各学級中核的な取組の掲示が充実してきていると感じました。組織的な教育実践研究の中で、それぞれの学級に「いろ」があり、それが重なり合って共同研究の方向性が伺える掲示だと思った。
- ・ オープンキャンパスのアンケート結果を読ませていただくと、参加者の共感的な受け止めが多い。子どもたちの実際の姿からそう感じていただくことが一番嬉しいと思いました。学校運営の方向性は間違いないと確信している。小中一貫型小学校・中学校に舵を切っていくことは賛成です。その中で、特色ある教育課程などが県内公立小中学校のモデルになることを願っている。今後、多くの自治体でこのような動きになることは間違いない。
- ・ 幼稚園からのつながりを見ながら参観した。段ボール一つで 発想力を養っている。低学年から高学年まで成長に沿った授業の展開が行われており、非常によかった。身近なものから歴史的なものまで、子供が自ら進んで学習に参加できていたと思う。学校目標の「活気ある、集中する、仲のよい子ども」を常にとらえたグランドデザイン、運営方針だと思う。遊び→領域→教科の流れは自然に子供たちが学習に取り組めると思う。小中一貫教育はこれからの時代、特色をもった魅力ある教育現場としてよいと思う。国立附属学校としての厚みのある学校運営を期待する。